

天草版平家物語と捷解新語

——謙讓語を中心に——

福 沢 将 樹

1. はじめに

1.1 『捷解新語』とは何か

『捷解新語』とは、17世紀に李氏朝鮮において初刊が印行された、日本語学習書である。その後18世紀末葉にかけて何度か改修が行われている。著者の事蹟や書誌的情報の基本的なことは先行研究に譲るが、大方を纏めると次のようになる¹⁾。

著者

康遇聖。万暦九年辛巳（1581）朝鮮慶尚南道「晋州」生。秀吉の朝鮮出兵の際、壬辰年（1592）に「被虜」、数え12歳で日本に連行される。以後10年間ほど日本（京阪地方か）で過ごし、1601年頃朝鮮に帰国。帰国後、万暦三十七年己酉（1609）に「訳科登第」する。

編纂の目的・用途

17世紀当時の日本語会話および書簡文の教科書である。この書の出現により、それ以前の教科書（『伊路波』を除いてほとんど現存しない）を駆逐する結果となる。書名『捷解新語』はなぜ『捷解日語』あるいは『捷解倭語』でないのかは問題であるが、当時の「現代」日本語の意味か、日本語自体がこのころ大きく変わった時期であるのかとも疑われる。

諸本

「原刊本」²⁾ 1676刊、康遇聖

「改修本」1748刊、崔鶴齡・崔寿仁

「重刊改修本」1781刊、崔鶴齡ほか

「文釈」行草体漢字かな交じり文、1796刊、金健瑞

成立時期、言語上の時代

原刊本の刊行は奥書より「康熙十五年丙辰孟冬開刊」(1676年)とされる。おそらく原著者康遇聖没後の刊行である。但し草稿の成立時期は17世紀前半に遡り、1636以降説(大友・中村・森田補注)が有力である³⁾が、1618説(小倉)などもあった。

音注と対訳本文は、仮名本文成立後に、原著者(康遇聖)以外の人物の関与がある(李1991)。

言語は『狂言記』に似ているとの説(小倉)もあったが、史実からしても言語そのものの現象からしても江戸時代に入ってから言語であり(大友)、元禄以前の時期のものということになる。著者の推定在住地からして京阪方言が中心ではないかとされるが、九州・対馬辺の方言・朝鮮訛りの混入も見られる。

内容

全10巻である。以下のまとめは森田(1985)および李(1991)に大きく負う。

- a 巻一〜四 日朝役人の対話(接待・貿易交渉)
巻一卷末に難語句解
- b 巻五〜八 朝鮮使節に関する対話(対馬〜江戸までの道中)
- c 巻九前半 日朝役人の対話(親睦の宴)
- d 巻九後半 日本の国尽くし
- e 巻十 候文体書簡文(但しひらがな漢字交じり文)および難語句解

	日朝役人の交渉	使節の道中	地理
対話体	a・c	b	
独白体・文章体	e		d

体裁

本項は先行研究に譲り、或いは影印を見れば一目瞭然であるので、簡略に示す。上記a・b・c・dの箇所ではひらがな漢字交じり文の日本語に対し、ハングルで発音を示す(音注)。ハングル漢字交じり文で意味を記す(対訳)。上記eに当たる巻十書簡文⁴⁾は、変体漢文をひらがな行草交じり文に全文楷書を付し、ハングル音注を付す。改修本・重刊改修本は漢文部分が全文行草体になり、これらに加えて漢字注と対訳も付す。なお文釈

本は音注・対訳を欠き、a～dがひらがな漢字（行草体）交じり文、eが同じく行草体の変体漢文のみである。改修本以降、話者の交替を「主」（朝鮮側の話者）「客」（日本側の話者）と標示する。また重刊改修本以降、巻末に「伊呂波」や五十音図等を附載する（巻名なし）。

以上のように、京都の言語を日本語の標準と考えたキリシタンたちによる天草版平家物語の印行（1592年）とさほど隔たらない時期に、さほど隔たらない地方の口語資料が得られたということは極めて奇遇である。但しキリシタン資料の言語は折り目正しさがあるが、本書は貿易・外交の場面が主とはいえ俗な印象を受ける。総じてキリシタン資料に比べて語法や表記上の統一感は劣る。特に原刊本のハングル音注表記で顕著である。これは著者自身の最終校正がおそらくなされなかったであろうことやネイティブ・インフォーマントへの確認もおそらくほとんどなされなかったであろうことも関係しているであろう。そのこともあって数度の改訂を余儀なくされたが、その間に日本語自体も変化していった。従って改訂前の言語が古い形だったのか、単なる不備であったのかを注意して用いる必要がある。

1.2 中世末期～近世初期の「口語」文体

「口語」らしい口語資料は古代にはなかなか得られないが、この時期、対話体の言語資料として狂言台本、キリシタン資料などが存在し、比較することができる。

『天草版平家物語』には平家自体の語りの部分と、喜一検校・右馬允の対話の部分があるが、後者の量は多くない。『虎明本狂言』も大部なものであるが、やはり芸能の台詞であり、日常会話ではない。その意味で本『捷解新語』は対話文の資料として一定の存在意義を有すると考えられる。

2. 敬語体系

『天草版平家物語』とほぼ同時代に日朝対照のできる語学書が存在することになるが、両書の研究として音韻・音価研究はかなりなされているが敬語は不十分である。『捷解新語』自体の敬語研究には青山（1959）・伊奈（1965）・辻村／韓（1980）・韓（1987）・韓（1995）・辻（1997）・永田（2001）・林（2001）などがあり、浜田（1970）・安田（1980）でも扱われている。そのほか人物呼称・人称代名詞の研究や条件表現の研究などもある。

本稿は、敬語体系全体を見渡しつつも、両書の全貌を明らかにするには程遠い。そこ

でいくつかの謙讓語とその謙讓用法の喪失したもの、そして丁寧語についてのみ論じる。

2.1 5分類とその修正案

文部科学省文化審議会の答申(2007)では、伝統的な敬語の分類を改め、5分類となった。「謙讓語」を2つに分け、「丁寧語」と区別された「美化語」を設けることとなった。また用言の敬語と体言の敬語を統一的に扱おうとする方向が見受けられる。これらは菊地(1997)の説に沿う部分もあるが、小異もある。

学校文法	文化審議会「敬語の指針」		菊地康人		
尊敬語	尊敬語	いらっしゃる おっしゃる 御住所	尊敬語	主語を高める	田中先生はアメリカにいらっしゃいます
謙讓語	謙讓語 I	伺う 申し上げる 先生へのご説明 先生へのお手紙	謙讓語 A	主語以外(補語)を高める(補語は主語より相対的に下)	先生をご案内する
			謙讓語 AB	主語を低め、主語以外を高める	先生をご案内いたしました
	謙讓語 II (丁寧語)	参る 申す 拙著 小社 夜も更けて参りました	謙讓語 B	主語を低める	これからデパートに買い物にまいります
			謙讓語 Bの丁寧語用法	聞手への丁寧さをあらわす	電車がまいります
美化語	美化語	お酒 お料理	(美化語)	きれいに・上品に述べる	お花 お菓子あげる
丁寧語	丁寧語	です ます	丁寧語	聞手に対して丁寧に述べる	です ます

文化審議会の謙讓語 II は、「自分側の行為・ものごとなどを、話や文章の相手に対して丁寧述べるもの」と説明される。しかし「夜も更けてまいりました」のように自分の事柄でないものも含まれている。これについては大石(1983)は両者を「謙讓語 B」と「丁寧語 A」に分け、菊地(1997)は「謙讓語 B(の本来の用法)」と「謙讓語 B(の純粹に)丁寧語としての用法」に分ける。但し大石の「丁寧語」はいわゆる丁寧語の「です」「ます」も含むことがある(「丁寧語 B」⁵⁾)。ここはやはり大石のように「謙讓語 B」と「丁寧語」は分けるべきであり、そのことで共時的・通時的記述がより明確になるものと期待される。

しかし大石(1983)が「丁寧語 A」を「話手が畏まり、聞手を高める」とする(170頁)⁶⁾には疑問がある。以下に大石(1983)の例を挙げる(105頁。原文カタカナをひらがな

に、傍点を傍線に改める)。

- ・今さらやめるわけにはまいらぬだろうと存じます。
- ・なにか変な音がいたしましたね。
- ・仙台には青葉城ともうす城がございます。⁷⁾

これらが「わけにはいかない」「音がしました」「青葉城という」という表現に変わると、聞き手は果たして自分が軽んじられたように感じるであろうか。むしろ大石が「上品語」⁸⁾と呼ぶ次のようなものと同列に並ぶものと見る。「上品語」とは、「聞手に対する意識のもとに使われることもあるが、要するに、自分のことばの品位のために使われるものである」とされる(大石 1986、107 頁)。

- ・お菓子を食べる。⁹⁾
- ・ごほうびをあげよう。
- ・あげ物にすると子どもたちが喜んでいただくの。¹⁰⁾
- ・お手洗いはどこ？

大石の「上品語」は、ふつう「美化語」と呼ばれることが多い。そして「美化語」は「お」「御」のつく体言が典型的なものとして取り上げられ、用言は触れられないか、小さな扱いにとどまることが多い。後に見る宮地(1999)は本稿で考える分類によく似た内包定義をしているのだが、外延はこの点で大きく異なる。

「上品語」「美化語」は、いわゆる丁寧語と区別がしにくい。改まった場面で話をする場合には、丁寧語を用いつつ上品語を駆使することも多い。しかし両者が食い違うこともある。体育会系の若者の用いる「っす」は先輩(聞き手)への敬意を表すが品位は高くない。女王様のようなキャラクターの発する「～するがよい」は女王様(話し手)の品位を高めるが聞き手への敬意はない。このように、「丁寧用法」¹¹⁾と「上品用法」は次のように区別される。

- ・丁寧用法：聞き手を高める。それをを用いないと聞き手は自分が軽んぜられたように感じる。
- ・上品用法：話し手の品位を高める。それをを用いないと話し手の品位が減じるように聞こえる。

この「上品用法」は、宮地(1999)の「美化語」の定義に似ている。宮地は「話題のものごとの表現をとおして、話し手が自分のことばづかいの品位への配慮をあらわす敬語」とする(69 頁)。

これらと「謙讓 B 用法」は次のように異なる。

- ・謙讓 B 用法：用言の主語は一人称もしくは一人称に關係する¹²⁾ 人・物にほぼ限られる。

- ・上品用法：三人称でも用いられる。一人称・二人称では不自然に感じられる場合もあるがこれは尊敬語や謙譲語の用法が残っている場合である。
- ・丁寧用法：人称の制限はない。

以上のように先行論を整理・修正し、以下の表に主なものとの対比を示す。

「～語」というと語彙項目そのものの分類のように聞こえる¹³⁾が、実際は同一の語彙項目が複数の用法を持つことがあるので、以下の表では「～語」の分類ではなく用法の分類として次の5種に纏めた。尊敬語は「主語を高める」という点が重要であり、「謙譲語B」は「主語がへりくだる」という点が重要である。これらに対し「謙譲語A」は「主語以外の成分を高める」という共通点がある。菊地の「謙譲語A」と「謙譲語AB」の区別は、細かく見れば分けるべきだが、表の上では纏めておく。「上品用法」¹⁴⁾の「話し手の品位を高める」というのは、尊敬や謙譲の上げ下げとは異なる。つまり「尊大語」や「自敬表現」とは異なるものである。時枝風に言えば「尊敬」「謙譲」は素材としての人物を上げ下げするものであるが、「美化」そして「丁寧」における「高める」は素材を高めるのではなく「主体」「場面」に関わるものである。言い換えれば、その語を用いることによってくだけていない場を演出し、そのことがだらけていない話し手像を創り出し、結果として話し手の品位を高めることになるのである。なお「素材を高めるのではない」ということと「時枝文法にいう詞ではない」ということは別の問題である。

用法	学校文法	文化審議会 敬語の指針	菊地康人	宮地 裕	大石初太郎	代表的な用例
尊敬用法	尊敬語	尊敬語	尊敬語	尊敬語	尊敬語	アメリカにいらっしゃいます ご住所
謙譲A用法	謙譲語	謙譲語Ⅰ	謙譲語A	謙譲語	謙譲語A	先生をご案内する
			謙譲語AB			先生をご案内いたしました 先生へのご説明
謙譲B用法	美化語	謙譲語Ⅱ (丁寧語)	謙譲語B	丁寧語?	謙譲語B	これから買い物にまいります 拙著 小社
上品用法			謙譲語Bの 丁寧語用法	美化語?	丁寧語A	変な音がいたします
	美化語	美化語	(美化語)	美化語	上品語	あげる お花 お菓子
丁寧用法	丁寧語	丁寧語	丁寧語	丁寧語	丁寧語B	です ます

前頁に諸説を対照した。左の列が本稿の提唱する名称である。但しスペースの都合上、触れるべき研究を挙げていないものがある。

2.2 各論

ここでは「謙讓語」に関わる補助動詞をいくつか取り上げ、上品用法・丁寧用法への移行の度合を見てゆく。

2.2.1 「たてまつる」

「たてまつる」は原刊本では巻十書簡文部分にのみ用いられ、対話部分には用いられない。改修本も同様。

天草版では多数見られる。

- ・平家もまた朝家を恨み奉らるることもなかった。(巻一第二 14 頁。高野本巻一「殿下乗合」、99 頁、「恨み奉る事も」、龍大本「恨み奉らるる事も」)

「奉らるる」の形は謙讓 A 用法に尊敬用法の「らるる」が複合したものと解され、積極的に上品用法と解されるものはない。

2.2.2 「つかまつる」

「つかまつる」は原刊本対話部分にも書簡文部分にも用いられている。謙讓 A の用例もあるが、上品用法も見られる。

- ・こんにちわ御いんきんの御ふるまい しょうしつ (終日) めつらしき御さうたん (雑談) うけたまわり ことにおおさけ (大酒) つかまつり たひの (旅の) うれいお (憂いを) のはし (のばし) ひとしゆ (ひとしお) めてたうこそそんすれ

(上略) je-mus-ge-ruug-hen-sur-'ur-he-go (下略) (六五オ～ウ。ハングルはローマ字¹⁵⁾ に直して示す。以下特に断らないものは原刊本)

この例では「話し手が大酒をつかまつり」即ち (話し手が大酒を頂き) と解釈することが可能であるが、奉仕の相手を表す成分が欠けており、謙讓 A とは解釈しにくい例である。謙讓 B への転化と見る余地もあるが、上品用法とも思われる¹⁶⁾。対訳朝鮮語にも特に謙讓語 -seb-¹⁷⁾ が用いられていない。

天草版でも文法上の相手成分を欠いた「つかまつる」は少なくないが、多くは意味上「……のために」を補って解釈することができる。次の例は比較的その解釈がしにくく、上品用法になりかかっているものである。

- ・^か翔^{とり}け鳥を^{みより}三度に^{ふたより}二度はたやすうつかまつると申す (四 17-335 頁。斯道本十一 102

「扇之的」647頁、「輒フ仕ルト申ス」)

(飛んでいる鳥を三度に二度はたやすく射止めます。江口正弘『天草版平家物語全注釈』による。以下特に断らない)

- ・まだ快気^{くわいき}つかまつらぬによって(四24-375頁。斯十二116「堀川夜討」737頁、「未快気ナラス候間」)

しかし天草版の「つかまつる」はまだ謙讓Aの段階としてよいであろう。

2.2.3 「いたす」「申す」

「いたす」は原刊本対話部分には1例のみである。但しこの例も、韓(1997:107)も指摘するように「いだす」である可能性がある¹⁸⁾。

- ・へちに(別に)しろし(記し?) いたすこともなし

byer-ro-po-her-ir-do-eb-se (八3ウ)

改修本以降には数十例を見る。「いたさるる」の例もある。

- ・おうかたにいたされぬやうにとうらいゑ(東萊へ)申て

dai-tyei-ro-i-he-ji-mod-her-'yan-'u-ro 東萊 -sgui-'yed-je-oa (改修本五7ウ)

この例は「客」(日本人)が東萊(朝鮮側)へ申し上げるのだが、「いたされぬ」は相手が「しない」の意味で、謙讓の意味は既ない。朝鮮語に尊敬語は用いられていないが、日本語は「いたさるる」全体で尊敬用法と解される¹⁹⁾。ちなみに原刊本では「さしられん」(五5オ)であり、対訳にも尊敬語 -si- が用いられている。

「いたさるる」全体が尊敬用法であるということは、その一部分である「いたす」はもはや「謙讓」用法ではなく、「謙讓語の上品用法」あるいは「非敬語」と解される。

「申す」にはこのような「申さるる」の例が少なくない。

- ・けにん(下人)のためにいわうての(祝うての)き(儀)と申されて……

下人 'ur-'ui-he-'ya 徳談 'eis-'ir-'i-ra-he-sye (七6オ)

- ・つしまのかみ申さるるわ……たいくんより申まいた(まいった)とあつて

對馬島主 ser-'o-mun……大君 sgui-sye-nir-re-'oas-da-he-go (八9オ-10オ)

第1例は自分側の主君の言動について語っているが、対訳朝鮮語に尊敬語 -si- が用いられている上に謙讓語 serb- (申し上げる)ではなく普通の「言う」を表す he- が用いられている。日本語でも謙讓の意味は曖昧である。第2例は日本の使者が対馬守の発言を引用し、自国側の主君の言動について語っているが、「申まい(っ)た」は動作主が自国側とはいえ「大君」であり、助詞「より」は対訳朝鮮語でも尊敬主格 sguisye である。但し述語は尊敬語 -si- は使われておらず非敬語 nire- (言う) である。

このように「申す」には謙讓 B のみならず、「謙讓」の枠を超えた上品用法も見られると解される²⁰⁾。韓 (1997: 144-8) は「する」の意の「申す」と「言う」の意の「申す」に分けて詳しく分析し、後者については「美化語」(上品用法) の例として次のようなものがあるとする。

- ・(A)「～という」を丁寧に表示して「～と申す」にしたもの
- (B)聞き手側の者の言うこと
- (C)話し手が話し手側の下位者にものを言うこと
- (D)話す主体が不明な場合
- (E)話し相手が不特定な場合
- (F)「申ても申ても」で「誠に」の意で使われたもの

続いて「申さるる」の明らかに尊敬語の例として次の例を挙げる (146 頁) が、ハングル音注からすると「もうされた」ではなく、「もうしされた」と読まれている (改修本: 「申しつけおかれましたれとも」七七オ) ので、確例とはしがたい。なお改修本では「美化語」の「申さるる」の例は大幅に増加する (韓 1997: 147)。

- ・かたく申されたれとも (七五オ)

天草版でも「申さるる」は多数見られる。「るる」を付加した全体は尊敬用法として用いられており、「申す」部分に謙讓の意味が残っているかどうかは曖昧である。次の例は 2 人の対話の場面で地の文の語り手は互いに「申さるる」を用いている。但し 2 例目は斯道本では謙讓語ではない。

- ・重ねて再三〔宗盛が父清盛に〕申されたれば、「さらば早う出家をさせまらして、おむろ室へ入れませい」と、〔清盛が子宗盛に〕申されたれば、…… (二 7-139 頁。斯四 39 「高倉宮最後」292 頁、「重テ再三申ケレハ」サラハ……トソノタマイケル)

また「(人名) と申す」という例が多数見られ、これらは謙讓よりも上品用法あるいは非敬語と見る余地がある。次のような例も同様である。

- ・宰相殿 からと言うて、使ひが来た。この宰相と申すは、清盛の 弟 でござるが、宿所は六波羅の総門の内にあつたによって、門脇の宰相殿と申した：(一 5-35 頁。高二 「少将乞請」、60 頁、「申は……とぞ申ける」)

このようなメタ言語として用いられる「申す」は、確かに検校から聞き手右馬允に対する謙讓 A、或いは過去の貴族に対する謙讓 A である可能性もある。しかし、こうした用法を多用していくうちに、いつしか聞き手が誰であっても謙讓 B として用い始めることも想像され、更には上品用法あるいは非敬語として用い始めることも想像される²¹⁾。謙讓語が上品語、更に非敬語へと変化した例としては、「たまふる・たぶる」→「食べる」

を挙げることができる。

2.2.4 「ござる」

ここで「ござる」についても触れておく。「ござる」は元々尊敬語であった。金水(2005)は対者敬語成立の過程で、謙讓語起源のものと尊敬語起源のものとは変化の契機が違うことを指摘している。

捷解新語で「ござる」はあらゆる人称について用いられる²²⁾。話し手側の事柄にも使うし、「～でござるか」のように聞き手側にも用いられる。従って謙讓専門の語ではない。

- ・御ころつけお(心付けを)たのむて御さる(話し手)

me'em-bur-ti-si-mur-mi-de-seb-nei (一4 オ～ウ)

- ・このあいたよう御さるか(聞き手)

'yo-se'i-dyo-hi-gyei-si-den-ga (二16 オ)

捷解新語の第1例は、話し手側の(頼むのです)の意であり、対訳朝鮮語でも謙讓語-seb-と丁寧語(恭遜法)の-iが用いられている²³⁾。第2例はgyeisi-('ある・いる'の尊敬語)と対応している。

天草版でも多く第三者に対して用いられ、話し手にも聞き手にも用いられる。聞き手に用いられたものには尊敬語と共起するものもある。

- ・かしこまてござる(13-16)〈話し手〉

- ・そのおことでござる(124-7)〈聞き手〉

- ・ややあって重盛涙を押さへて〔清盛に〕申さるは：〔中略〕又おん有様さらに現とも覚え、太政大臣の官に至る人の甲冑を鎧ふこと、礼儀を背くではござないか？ 就中^{なかんづく}に御出家のおん身でござる。(45-11・12)〈2例とも聞き手〉

この時代の「ござる」のように一人称にも二人称にも用いられるものは、「あるものは尊敬、あるものは謙讓、両方の用法を持つ」という可能性も確かにあるが、圧倒的に多数の第三者(三人称)の用例があることからすると、どちらも上品用法あるいは丁寧用法である可能性が高い。金水(2005)は、天草版の「ござる」の分布をもとに、読み手が「丁寧語」と読み誤ることによって対者敬語化したというモデルを提示している。

次項の「まるする」「まらする」と複合して「まるしてござる」「まらしてござる」という形態にもなる。ロドリゲス『大文典』は「まいらする」「まらする」について次のように言う。

- ・身分の低い者が、目上の人と話したり貴い方の前で話したりする場合に、この助辞に先行する動詞が身分の低い者が特別に敬意を払ふ必要のない者かの動作を示す時

には、この助辞を使はねばならない。さうして助辞の終には Gozaru (御座る) を置く。それが最上の丁寧さを表すのである。(土井訳 585 頁)

ここで「まいらする」「まらする」が謙讓 B 用法であることが示されている。

一方「てござる」の形は「完全過去」(土井訳 47 頁など)であり、丁寧でないし上品度の低い形態としては「まらした」という形がある。「た」の代わりに「てござる」が用いられているのであって、「まらする」と重複しているわけではない。

なお韓(1995:152)は「まるする」に後接する「ござる」は尊敬語ではなく「美化語」であるとす。次の例を挙げる(話し手・聞き手の判断も韓に従う)。

・こちわ御かけおもつて なにことなうつきまるして御さる <日本側の都船主→朝鮮側の東萊府使>

'u-ri-nen-deg-bun-'ur-bse 'a-mur-'ir-do-'eb-si-'oan-nei-'i-da (二 1 ウ)

・わすれまるして御さた (ござった) <日本側の正官→朝鮮側の東萊府使>

ni-jes-dda-so-'i-da²⁰ (三 3 オ)

「ござる」が上品用法(美化語)であるか丁寧用法であるかは次項で再び検討する。

2.2.5 「まいらする」と「まらする」「まるする」「まする」

捷解新語に「まいらする」の語形は見られない。この本動詞が転訛した「まるする」(原刊本)「まする」(改修本以降)の形が見られ、現代語の「ます」に似て丁寧語のように見える。なお改修本以降の「まする」の音注は ma-ssu-ru と振られており、既に指摘があるように「マッスル」のような音価であったことを窺わせる。捷解新語の「まるする」の形は他書に例を見ず、他書では「まいらする」「まらする」或いは「まする」となっており、「まるする」の語形は「まらする」から「まする」への歴史的变化の過程に短期間存在した(浜田など)か、或いは方言が現れた可能性(森田)も考えられている。

天草版では「まる(い)らする」の語形が見られるが、やはり「まらする」の方がずっと多い。「まるする」「まする」の形は見られない。よって、捷解新語は天草版よりもやや後の時代の言語を反映していると考えられている。但し抄物には「ます」の形が既に天文3年『四河入海』や寛永15年『蒙求抄』等に見られ(湯沢 1955:220-1)、テキストの性格も関係する。

これらは、意味的には現代の「ます」に近く感じられるが、「ます」に比べて豊富な活用を持つ。天草版では「まらせうず」「まらせられ」「まらし」「まらした」「まらすまい」「まらする」「まらすれ」「まらすれば」「まらせい」など。原刊本では「まるせうず」「まるした」「まるすまい」「まるする」「まるすれ」など。このことは「まらする」「まする

る」がまだ補助動詞であることを示す。しかし用法も未だ謙譲であることを示すわけではない。湯沢（1940）は「夜がふけませうずれども」（天 42-2）のような例を挙げ、「第二種の謙語から更に用法を拡めて、第三種の様になった」（73 頁）即ち「話^マ対^マ手を尊敬することから、話し[○]ぶりを丁寧にする」（42 頁）用法が出現したことを指摘する。

さてこれらは上品用法なのか丁寧用法なのか。捷解新語において使用頻度は比較的高く、ほとんど毎文のように「まるする」か「ござる」が用いられる²⁵⁾。但し「-らるる」など他の敬語が用いられる場合には不使用が許されるようである。この点は現代の丁寧語とは異なる。天草版においては更に不使用が許されているようであり、捷解新語ほどの使用頻度ではない。

これらのことは、テキストの性質、語り方のジャンルの問題とも関わり、一概に使用頻度だけから言うことはできないが、天草版は基本的に謙讓用法で、上品用法を生み始めたばかりであり、未だ丁寧用法を発達させていないが、捷解新語は既に上品用法を基本としており、ただし現代語の丁寧用法とは未だ性格を異にしていると見ることができ

る。一方「ござる」もまた毎文必ず用いなければならないわけではなく、「ござる」が多用される文体の中でも「まるした」「まらした」の形がだいたい許されるようである。この点はやはり現代の丁寧語とは異なる。

2.3 まとめ

以上見てきたように、両書に見られる日本語には明確に謙讓用法専門と思われるものは「たてまつる」など少数であり、また天草版や書簡文に限られていた。他の多くの「謙讓語」は上品用法を派生させていた。

このことはその後の江戸・東京語や現代共通語の「謙讓語」のあり方に関して考えるべきことを示唆する。つまりこんなに古くから「申さるる」が存在していたにも拘わらず現代に至っても「申される」が誤りとされることがあるのはなぜなのかといったことである。これは東西の方言差や江戸語の成立、特に江戸語の敬語体系の成立の問題かもしれないし、近代の標準語制定や教育が大きく関わる問題かもしれない。

3. 外国語学習書として

最後に、両書の「学習書」としての性格を考えてみたい。

我々が外国語を学ぶ際、必ずしも「リアル」な例文から入るわけではない。例えば言

い淀みや言い間違いをほとんど含まない、標準化された文型・談話例を元に学ぶ。『捷解新語』は必ずしも当時の「リアル」な日本語を反映したものではないが、「朝鮮人にとって標準的と感じられる日本語」ではあった可能性がある。

一方『天草版平家物語』における対話部分は、分量も少なく類型的に過ぎ、これのみで日本語会話の習得に役立ったとは思われない。もっと初級段階のものが必要であっただろう。しかしキリスト教宣教師にとって、普通の「対話」能力よりは、キリスト教の教義を伝達する際の日本語が必要であったとするならば、「語り」として一方的に語り続ける日本語の方が必要とされたものかもしれない。

従って、敬語法についても表面上の相違以上に、そもそも想定されている場面が異なる可能性がある。そしてそれぞれの資料はそれぞれの目的のために必要な場面が選ばれていると考えられる。

参考文献

- 青山秀夫 (1959) 「捷解新語に見える敬語法の特徴」『天理大学学報』28
- 穂田定樹 (1976) 『中古・中世の敬語の研究』清文堂出版
- 石坂正蔵 (1969) 『敬語：敬語史と現代敬語をつなぐもの』講談社
- 伊奈恒一 (1965) 「捷解新語に現われた敬語について」『語文』(日大) 21
- 大石初太郎 (1983) 『現代敬語研究』筑摩書房
- 大石初太郎 (1986) 『敬語』筑摩書房 (初刊 1966 年大泉書店、改訂版 1975 年筑摩書房)
- 大友信一 (1957) 「『捷解新語』の成立時期私見」『文芸研究』26
- 小倉進平 / 河野六郎 (補注) (1964) 『増訂補注朝鮮語学史』西田書店
- 蒲谷宏 / 川口義一 / 坂本恵 (1998) 『敬語表現』大修館書店
- 菊地康人 (1997) 『敬語』角川書店 (後に講談社学術文庫)
- 菊地康人 (2003) 「敬語とその主な研究テーマの概観」『朝倉日本語講座 8 敬語』朝倉書店、2003
- 金水敏 (2004) 「日本語の敬語の歴史と文法化」『言語』33-4
- 金水敏 (2005) 『日本語敬語の文法化と意味変化』『日本語の研究』1-3
- 金水敏 (2011) 「丁寧語の語源と発達」高田博行他 (編著) 『歴史語用論入門：過去のコミュニケーションを復元する』大修館書店
- 河野六郎 (1979) 「朝鮮語」下中邦彦 (編) 『河野六郎著作集第 1 卷：朝鮮語学論文集』平凡社 (初出 1955 年)
- 辻星児 (1997) 『朝鮮語史における『捷解新語』』岡山大学文学部

- 辻村敏樹（1968）『敬語の史的 연구』東京堂出版
- 辻村敏樹／韓美卿（1980）「捷解新語の「言う」の敬語形——日本語の敬語と韓国語の敬語——」『国語学研究と資料』5
- 永田高志（2001）『第三者待遇表現史の研究』和泉書院
- 中村栄孝（1969）『日鮮関係史の研究 下』吉川弘文館
- 浜田敦（1970）『朝鮮資料による日本語研究』岩波書店
- 林義雄（2001）『捷解新語』における「オシラル」の変容』日本語研究会（編）『日本語史研究の課題』武蔵野書院
- 文化審議会（2007）『敬語の指針』
www.bunka.go.jp/bunkashingikai/soukai/pdf/keigo_tousin.pdf
- 宮地裕（1999）『敬語・慣用句表現論——現代語の文法と表現の研究（二）——』明治書院
- 森田武（1955）「捷解新語」成立の時期について』『国語国文』24-3
- 森田武（1985）『室町時代語論攷』三省堂
- 安田章（1980）『朝鮮資料と中世国語』笠間書院
- 安田章（1990）『外国資料と中世国語』三省堂
- 安田章（2005）『国語史研究の構想』三省堂
- 湯沢幸吉郎（1940）『国語学論考』八雲書林
- 湯沢幸吉郎（1955）『室町時代言語の研究：抄物の語法』風間書房
- 朴喜南（1987）「敬語を通してみた接続助詞の陳述性——朝鮮資料『捷解新語』を中心に——」『国語学』156
- 朴喜南（1991）『捷解新語』による敬語の構文論的研究——従属節の陳述性の関わりについて——』『岡大国文論稿』19
- 李康民（1991）『捷解新語』の成立と表現』『国語国文』60-12
- 李基文（著）村山七郎（監修）藤本幸夫（訳）（1975）『韓国語の歴史』大修館書店（原著 1974 改訂三版）
- 韓美卿（1987）「日本語の敬語研究——『捷解新語』에 나타나는「ござる」의 用法——」『日本文化研究』3（韓文）
- 韓美卿（1995）『捷解新語』における敬語研究 I』박이정、ソウル（和文）
- テキスト・索引・注釈書・辞書
- 近藤政美／池村奈代美／濱千代いづみ（編）（1999）『天草版平家物語語彙用例総索引』

勉誠出版

江口正弘 (2009) 『天草版平家物語全注釈』 新典社

市古貞次 (編) (1973) 『高野本平家物語』 笠間書院

慶応義塾大学附属研究所斯道文庫 (編) (1970) 『百二十句本平家物語』 汲古書院

京都大学文学部国語学国文学研究室 (編) (1957) 『捷解新語：本文・索引・解題』 京都大学国文学会

京都大学文学部国語学国文学研究室 (編) (1987) 『改修捷解新語：本文・国語索引・解題』 京都大学国文学会

京都大学文学部国語学国文学研究室 (編) (1960) 『重刊改修捷解新語：本文、国語索引、解題』 京都大学国文学会

京都大学文学部国語学国文学研究室 (編) (1963) 『捷解新語文釈：本文・解題』 京都大学国文学会

村田寛 (2009) 「原刊本『捷解新語』の朝鮮語 KWIC 索引——正順——」『福岡大学研究部論集人文科学編 A』 9-5

J. ロドリゲス (原著) 土井忠夫 (訳注) (1955) 『日本大文典』 三省堂

劉昌惇 (1964) 『李朝語辞典』 延世大学校出版部 (1990 年八版)

李熙昇 (1983) 『ハングル大辞典』 民衆書林、ソウル (韓文)

大阪外国語大学朝鮮語研究室 (編) (1986) 『朝鮮語大辞典』 角川書店

注

- 1) 森田 (1985) に大きく負う。
- 2) 本稿ではソウル大学校奎章閣蔵本〈貴〉一六三八の影印 (京都大学国文学会刊) を用いるが、安田 (1990)・李 (1991) が注意するように、異本が数点発見されているので、対校の必要がある。
- 3) 口頭発表時レジユメを訂正する。
- 4) 発表時レジユメには誤った不正確な情報を載せた。ここに記してお詫び申し上げる。
- 5) 大石 (1983) 「待遇語の体系」および「現代敬語の一側面」注では「丁重語 A」「丁重語 B」と分かれているが、後者「補記」では「丁重語」に一括されている。一方前者「補記」では依然 ABに分かれたままである。本稿では「待遇語の体系」補記をもとにした。
- 6) 宮地 (1999) も「丁重語」を「話題のものごとの表現をとおして、話し手が聞き手

への配慮をしめす」としている(69頁)。但し大石の「謙讓語B」に当たる「絶対謙稱」は現代語には存在しないと見ている(68、146-150頁)。この点で2・1節に作成した表の中で、宮地の「丁寧語」は他の論者と大きく性格が異なる。

- 7) これら大石の例文、原文が漢字片仮名、傍点で表記されていたものを直した。以下も同様。
- 8) 注5同様、初出論文では「美化語」「ぞんざい語」となっていたものを、大石(1983)の単行本収録に当たって「上品語」「下品語」とされた。
- 9) 「たべる」は「くう」と比較して上品語とする。
- 10) この「いただく」は「食べる」の意と解される。
- 11) 以下本稿で提示する用法の名称は、口頭発表時から大きく改めた。
- 12) ここでいう「人称」は、石坂(1969)の「敬語的人称」という概念を用いればすっきりと表現できる。
- 13) 蒲谷ほか(1998)『敬語表現』は徹底的に語にこだわった詳細な分類を提案している。大いに勉強になったが、本稿で検討を加える余裕がない。
- 14) 口頭発表時は「美化」としたが、大石(1983)に倣うこととする。
- 15) 基本的に河野六郎1955年式による(河野1979所収)。なお'とηとの区別は、影印でははっきりしないものもあり、また有意な違いはないとみて(辻1997:44-5)初声は'、終声はηと統一する。
- 16) 韓(1995:140-1)は謙讓語から美化語へ転化した例として他の用例を挙げる。
- 17) この形式は「謙讓法」と呼ばれる(李1975)が、原刊本では既に疑問文や命令文で聞き手主語の場合にも用いられ、辻(1997:105)が指摘するように「丁寧体」に変化しているとも見える。しかし現代日本語の「です」「ます」や現代朝鮮語の-subnidaほどの使用頻度でもなく、未だ「謙讓法」のイメージは残っていたかにも見える。
- 18) 「いたす」の音注は特に濁音表記がなされていないので積極的に「いだす」とすることはできない。しかし対訳のpoは「重ねて」という意味であり(『李朝語辞典』他)、日本語の「しろし」との対応関係を読み取ることは難しい。結局「しろし」という文字列字体の問題を含めて疑問例である。
- 19) 韓(1997:142)もこの例を挙げ、改修本の「いたさるる」は5例とも「話し手側の上位者」に用いられていると指摘する。
- 20) 韓(1995:84)は「謙讓語から美化語に変わった「申す」「存ずる」「参る」の後に[-(ら)るるを——引用者補]付加して主に自分側の上役である第三者のことを表

- す時に使われている。」と指摘する。
- 21) 金水 (2004) に関連する議論がある。
- 22) 「ござる」は活用語にも無活用語にも接続する。動詞には「てござる」(活用の種類によっては「でござる」。以下「てござる」で代表させる)、形容詞には「うござる」、形容動詞語幹および無活用語には「でござる」「にござる」の形になる。なお本動詞としての「ござる」も存在する。「動詞+てござる」は全体で過去テンス或いは現在完了アスペクトを表すが、「動詞+た」という語法もある。
- 23) -nei の -ne- は現在時制、-i は丁寧語(恭遜法)語尾 -nida の変化したものである(李 1975 : 183・240)。
- 24) (e)s-dda が過去もしくは現在完了を表し、so-i-da が丁寧を表す。so- は謙讓語 -seb- の変化形の一つと思われる。
- 25) 対訳朝鮮語との関連では、辻 (1997 : 118) が指摘するように、「申(す)」には -i という半言(パンマル、丁寧度のやや低い形態)が用いられるが「申まるする」には -ida というより格式高い形態も用いられるといった傾向の差がある。またこれらは場面によって使用頻度に大きな違いがあることも指摘されている。